

稲葉 陽二

日本大学法学部 教授

格差の是正と社会関係資本の改善は、高齢者の医療費を削減できるか

本研究は、経済格差が人々の中の絆を意味する社会関係資本を毀損し、さらに社会関係資本の毀損が人々の健康に影響を与えるという仮説の実証研究である。稲葉（2010）では全国の市町村レベルの国勢調査データに基づき、高齢者就業率が高いほど一人当たり老人医療費が低いことを実証している。また都道府県レベルで見ると、高齢者就業率は社会関係資本の中の社会参加指数と相関が見られるところから、高齢者の社会参加が一人当たり老人医療費の削減をもたらすという仮説を検討している。

本研究ではこの仮説を個別の自治体レベルにあてはめ、所得格差が全国の市町村のほぼ平均レベルの長野県須坂市と格差が少ない徳島県上勝町において郵送調査を実施した。残念ながら、格差の社会関係資本に対する影響は現段階では明確でない。

しかし、上勝町においても社会参加が人々の健康に影響を与えている。特に上勝町の特産である葉物の出荷（彩事業）を通じての社会参加が一人当たり老人医療費の水準と相関しているとの結果を得た。また、彩事業参加者は非参加者と比して、統計的に有意に主観的健康と抑うつ度について良好であった。社会参加の機会を代理変数としてみたネットワークから見た構造的な社会関係資本は住民の健康状態を改善している可能性がある。ただし、一般的信頼などの認知的な社会関係資本は、稲葉が2010年別途に実施した全国調査の結果よりも低く、認知的な社会関係資本は一人当たり老人医療費との相関についてはより詳細な個票レベルでの分析が必要である。